

## 臨地実習指導者における教師効力尺度の測定—A 県看護師を対象とした調査より—

荒木恵子、松井由美子  
新潟医療福祉大学 看護学科

【背景・目的】近年、看護職の役割は拡大しており、看護師数を増やすと共に、看護の質の向上も求められている。看護師数を増加させ、看護の質を向上させるためには、看護基礎教育が重要である。看護基礎教育の中でも臨地実習は、講義や演習で学んだ知識と技術を統合させ、看護実践能力を学ぶ重要な教育の場である。臨地実習で出会う指導者は、学生の看護観に影響を与える非常に重要な役割を担っている。先行研究では、看護系大学教員を対象とした教師効力の測定は行われているが、臨地実習指導を担う看護師に対して行われている研究は少ない。臨地実習指導者の教師効力を測定することで、学生に円滑な指導を行うために必要な支援を検討する。

【方法】A 県にて臨地実習指導者養成講習会を受講する看護師 53 名に対し、実習指導における教師の自信を測定する「実習指導に対する教師効力尺度」<sup>1)</sup>にて質問紙調査を実施し、7つの因子別に分析した。なお、本研究は新潟医療福祉大学倫理委員会の承認を受けている。

【結果】対象者 53 名に対し 50 名から回答を得た(回収率 94%)。回答に欠損のある者を除外した 48 名を分析対象とした(有効回答率 96%)。対象者の属性は男性 10 名、女性 38 名であり、平均年齢は 33.6 歳であった。看護師経験年数 4~22 年で、平均 11.9 年であった。臨地実習指導者としての経験年数 0~10 年であり、平均 1.9 年であった。

調査の結果、尺度全体の平均値±標準偏差は  $2.5 \pm 0.71$  であった。因子別の平均点は「看護実践能力を活用できる自信」が  $2.7 \pm 0.40$ 、「学習者としての学生を尊重する自信」が  $2.7 \pm 0.48$ 、「カンファレンスを実施できる自信」が  $2.6 \pm 0.42$ 、「実習教育の準備が出来る自信」が  $2.6 \pm 0.50$ 、「学生の状況を判断できる自信」が  $2.3 \pm 0.60$ 、「学生の学びを促進できる自信」が  $2.2 \pm 0.50$ 、「学びを深めるために技法を活用できる自信」が  $2.2 \pm 0.66$ 、の順であった(表 1)。

尺度項目のうち、最も平均点の高い項目は「学生の臨地における看護行為が間違っている場合、間違いを判断できる」 $2.9 \pm 0.44$  であった。一方、最も平均点の低い項目は「学生から指導者への実習評価を取り入れている」 $2.0 \pm 0.89$  であった。次いで平均点の低かった項目は「臨地実習の場で学生が問題解決をはかれるような発問をする」 $2.1 \pm 0.67$ 、「学生が専門職としての態度や能力を学びたいと思うよう学生の意欲を刺激する」 $2.1 \pm 0.68$ 、「必要時学生と個別面接を行う」 $2.1 \pm 0.73$  であった。

表 1 n=48

項目 (得点範囲: 点数)	平均	±	SD
実習教育に対する教師効力尺度総得点 (28~112 点)	69.5	±	10.9
第 1 因子 カンファレンスを実施できる自信	2.6	±	0.42
第 2 因子 看護実践能力を活用できる自信	2.7	±	0.40
第 3 因子 学習者としての学生を尊重する自信	2.7	±	0.48
第 4 因子 学びを深めるために技法を活用できる自信	2.2	±	0.50
第 5 因子 実習教育の準備が出来る自信	2.6	±	0.50
第 6 因子 学生の状況を判断できる自信	2.3	±	0.60
第 7 因子 学生の学びを促進できる自信	2.2	±	0.66

【考察】本研究の対象者の属性は、臨地実習指導者としての経験年数が平均 1.9 年であり、指導者としての経験は浅いといえる。しかし、看護師経験年数は平均 11.9 年であり、ベテランであるといえる。よって、自らの看護実践を学生に見せ、根拠を説明することができるため、「看護実践能力を活用できる自信」の平均点が高いと考える。一方、「学生の学びを促進できる自信」、「学びを深めるために技法を活用できる自信」の平均点は低い。押領ら<sup>2)</sup>は、臨地実習指導者は学生の実践を促進させるための関わりに困難を感じていると述べている。この結果は、本研究結果と類似すると考えられる。臨地実習指導者は教育技法についての知識が不足しているため、学生の学習を促進する関わりに対する自信が低いと考える。

看護教育の質的向上を図るために、看護師への支援として都道府県は臨地実習指導者養成講習会を開催している。講習会を受講することで、教育技法を学び、自信を高めて実習指導を行うことが出来るかと考える。それにより、臨地実習指導の質の向上につながると考える。

【結論】看護師経験年数が長く、臨地実習指導の経験の浅い看護師は、看護実践能力を指導に活用する自信は高い。しかし、教育技法を用いて、学生の意欲を刺激することや、意図的に質問して思考を促す自信は低く、強化が必要である。学生に円滑な指導を行うために、臨地実習指導者養成講習会にて教育技法を学び、強化を支援する必要がある。

### 【文献】

- 1) 坪井桂子, 安酸史子: 看護系大学教師の実習教育に対する教師効力尺度の検討, 日本看護科学学会誌, 21: 37-45, 2001.
- 2) 押領司民, 河西光子, 森川三郎ら: 臨地実習指導者が役割の中で感じている臨地実習指導における困難の因子分析, 日本看護学会論文集, 46: 163-166, 2016.

【謝辞】アンケートにご協力いただきました看護師の皆様、心より感謝申し上げます。